

## 『ルツ記』への手引き

「さて士師<sup>さばきつかさ</sup>たちが 治めていた日々<sup>じだい</sup>のことであった。……」(ルツ1:1)

冒頭の「見出し」を受けて、ギリシア語七十人訳(LXX)、ラテン語訳(Vulgata)、あるいは宗教改革期の各国語訳における『ルツ記』は、『士師記』と『サムエル記』の間に位置付けられる。ほとんどの邦訳聖書も同様。内容や文体の上はしかし、『士師記』をはじめとするいわゆる「申命記史書」と特別な関わりがあるわけではない。ヘブライ聖書に基づくユダヤ教の伝統において、『ルツ記』は「メギロット」と呼ばれる祝祭関連五書の第一の書であり、七週祭(過越期間中の「(大麦の)初穂の祭」から七週間となる安息日の翌日)に朗読されてきた。ルツ記が、大麦の初穂(1:22「大麦の刈り入れの始まるころ」3~4月)から収穫終わりの脱穀(3:2「麦打ち場で大麦をふるい分ける」6月ごろ)までという時間の枠組みで展開するためである。

大麦(写真上)の収穫終わりは、小麦(写真下)の初穂の刈り入れ時期と重なる。この時を祝いとする七週祭は、レビ記23章15~21節等に基づくものであり、「(小麦の)初穂の祭」「刈り入れの祭」「(大麦初穂から50日めの)五旬祭」、また新約(ギリシア語)では「ペンテコステ」とも呼ばれる。

なお、現在に至るユダヤ教の七週祭では、律法の賦与(出エジプト記19:1~13)を記念することに、さらなる重きがおかれるが、この点において、『ルツ記』の内容との直接の関係はない。

『ルツ記』では、とくに第2章からの主題となる「収穫」が、最終的にダビデ家に至る「家名の存続」(新共同訳見出し)、「生命樹(系図)の祝福」と関連付けられる。それらの祝福を保つのは人間ではなく、異邦においても働くイスラエルの見えない神の働き(摂理)であることが、寡婦ナオミと、異邦人ルツの言行をとおして明らかにされてゆく。

本書の執筆年代については、確定的なことは何もわかっていない。異邦人に対して比較的寛容な『ヨナ書』などと同時期に書かれたのではないかと推測される。すなわち捕囚後の一定期間を経たうえで書かれたと考えられるわけであるが、一方で、捕囚後のユダヤ教成立の過程で「サマリア人」と呼ばれることになる人々をめぐって論争された「雑婚」の問いに関して、帰還の民を導いた総督ネヘミヤなどとは異なる立ち位置にあることは明白である。あるいは本書は、『エズラ記』、『ネヘミヤ記』に示されるような、排外主義的政策が偏狭な民族主義に陥ることへの批判として書かれたのかもしれない。

参考: Martin Rösel, *Bibelkunde des Alten Testaments*, Neukirchener, 6. Auflage 2008.

——16~17世紀: チューリヒ聖書やルター、オリヴェタン訳、ジェームズ王欽定訳聖書等  
邦訳中 岩波(旧約聖書翻訳委員会)訳はその限りでなく、ヘブライ聖書に従う。

——その他の「メギロット」各書と、それぞれの朗読がなされる祝祭は以下のとおり:

『雅歌』 過越祭の安息日 (3~4月)

『コヘレトの言葉』 仮庵祭

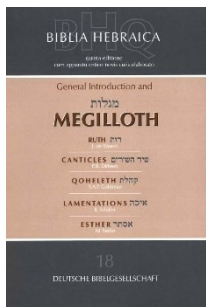
『哀歌』 アヴの月第九日

(エルサレム陥落記念、7~8月)

『エステル記』 プリム祭(過越一か月前)

なお、「メギラー」は巻きものを意味し、単数形の場合もっぱら『エステル記』を指す。

——ユダヤ教の「七週祭」とキリスト教の「ペンテコステ」(聖霊降臨記念日)とは日が重なる。



——「ネヘミヤの改革」において、「モアブ人の女と結婚」することも含めた異邦人との雑婚は罪とされる(ネヘミヤ13:23以下)。

さて、文学様式によるならば、本書は一貫してヨセフ物語（創世記37章以下）にも類する「ノヴェレ」（散文物語）として分類できよう。その構造は、よく練られたものであるらしい（下図参照）。

登場する人物名はしばしば類型化されており、その傾向は、マクロン（=病弱）やキルヨン（=脆弱）といった男性名において顕著である（一方のナオミやルツの名前が意味するところは不明瞭な面があるが、それぞれ「愛らしさ」や「友なる女性」の親しみを思わせる）。ナオミの夫エリメレクは「わが神は王」を意味するが、彼はルツ記冒頭で早くも死んでしまう。これらの象徴的な名前に示される隠された主題は、イスラエルが「エリー」と呼ぶ神の王的な支配が失われたかに見える時代の、民の「病弱さ」「脆弱さ」の中において、神が最も弱い者の愛と信頼の物語を導き、異邦を含む大いなる統治をもたらす来るべき王を備えておられる、という点にある。

文学作品としての『ルツ記』			
第1章	第2章	第3章	第4章
物語られた時代：1章 1節 士師時代			
主要な人物			
ナオミ	ルツ	ルツ	ナオミ
状況描写			
書全体／第1章 に関わる ユダヤ人の家族の紹介	ボアズの紹介		
導入となる会話			
	ルツとナオミ	ナオミとルツ	
	場所：ベツレヘム	場所：ベツレヘム	
中心的な対話			
ナオミ —ルツ+オルパと —ルツと	ボアズ —監督と ルツの身元についての問い —ルツと —ルツ+労働者たちと	ボアズ —ルツと ルツの身元についての問い	ボアズ —親戚と —長老たちと
第二の行動の可能性を示す人物の撤退 オルパ			第二の行動の可能性を示す人物の撤退 親戚
場所：道にて	場所：畑にて	場所：脱穀場にて	場所：城門にて
鍵となる箇所			
16節以下	11節	13節	9節
ルツからナオミへ： 誓い	ボアズからルツへ： ナオミと人生を共にするとのルツの決断	ボアズからルツへ： 誓い 人生を共にするとの決断	ボアズから長老たちへ： ルツやナオミと人生を共にするとの法的証言による決断
時間の枠組			
	朝から（7節） 日暮れまで（17節）	夕べから（2節） 夜明けまで（14節）	
示唆的な会話			
	ナオミとルツ	ナオミとルツ	
	ルツによるボアズの引用 21節	ルツによるボアズの引用 17節	
	しゅうとめの助言 22節	しゅうとめの助言 18節	
語り			
ナオミから ベツレヘムの女たちへ 19b—21節			ベツレヘムの女たちから ナオミへ 14—17節
展望			
2章を臨み 刈り入れの始まり	3章を臨み 刈り入れの終わりまで しゅうとめのもとに留まる 23節	4章を臨み 法的措置の終わりまで しゅうとめのもとに留まる 18節	サムエル記上1章を臨み オバドからエッサイを経て ダビデへ 17b—22節 物語られた時代： 4章21節以下 士師時代